
機密給仕～シークレットサービス～？

K-hell

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機密給仕〜シークレットサービス〜？

【Nコード】

N85760

【作者名】

K-hell

【あらすじ】

1950年代戦後日本。合法麻薬による記憶改ざんが認められた世界で、GHQの秘密組織『機密給仕』が水面下に仕事を遂行する。最終章、爆弾魔になり世界へ復讐しようとする結城を将門は止められるのか。

機密給仕？～サーボマーと解毒薬～

0＞秋の梅雨空、日本の空が灰色に染まる。それは目に滲みるきなくさい煙と原型すら留めない爆発物の跡だった。奇跡的にまだ被害者は出ていなかった。

犯行声明が民間放送各局に送りつけられた。『日本を腐らせた卿候は皆殺しだ』新聞の切り抜きで出来た不気味な文字は日本全土を震撼させた。

民放各社はこぞって、『卿候とは誰か』『犯人の目的は何か』と犯人をはやし立てかねないくらい報道に熱を上げた。日本人を疑心暗鬼の底に落とすことが犯人の狙いだったのかもしれない。連続爆弾事件の始まりは静かだった。

1＞爆殺

始まりって奴は本当に意味ないものの事が多いもんだ。この連続爆弾事件も例外でない。リクは思い悩んでいた。

「卿候？ずいぶん古い言い回しだね。狙われたものは、無人の警察車両に、GHQ管轄のビルのエントランスにあるゴミ箱、首相官邸

の門：なんだか何がやりたいかわかんない。ヒトを殺すって予告するわりに子供の嫌がらせの域を出てないんだ。これじゃあ、僕らをいたずらに警戒させるだけだよ」

どんなに物騒な話でも、子供の嫌がらせのままじゃG H Qも警察も動かない。犯人は今のところ脅迫と器物破損だ。俺も家に火をつけられた訳じゃないから他人事だ。優雅にティータイムにしようぜ。カズサからティーカップをもらっ

「やるなら本気出せって感じた。しかし見計らったようにヒトがないタイミングで火をつける奴だな。逆に目立たないように狙っていると思えない」

リクも同じくティーカップをもらい、口をつける。かわいい子猫模様のカップ。

「そうだね。運良く被害者が出ていないだけかもしれないね。あまり事を荒立てて欲しくないけど、解決しようにも情報が少なすぎるよ。G H Qが介入するか際どい事件だね」

リクが怒るとほっぺが子供のように赤くなる。リンゴほっぺ。結局犯人は方向性なしの軽犯罪を繰り返す変態だ。

さてこの事件は一本の電話から急展開で再び始まる。ホノカがいつものように呼び鈴に気付いて出た。お母さん口調のホノカはすぐにリクに代わった。ふーん、サイオンジからお電話ですかい。リクの顔色が一気に変わる。大事件に展開する。

首相専用車が爆発しドライバーが死亡、日本銀行店内で不審な小包が爆発し当時店内にいた数名が重軽傷、サイエー製薬本社で同じく小包が爆発し、開けた職員が死亡した。一気に3つも事件は発生した。前代未聞の犯行に警察の小包検閲や不審者の職質が厳しくなった。

犯行レベルが一つ上昇した。ややあつてテロリスト声明が出た。

『この世に蔓延る悪行、合麻法に関わるサイエーのトップ上位者、アメリカのいいなりでドッジラインを認めた日本政府と日本銀行を手始めに弾圧した。私はG H Qに代わって日本を動かす新卿候である』

爆弾卿候、俗にサーボマーの登場である。警察とG H Qの網をくぐり奴の犯行は激化する。いや、奴らと言った方が正しいのかもしれない

ない。何れにせよ、サーボマーは1人で頭のいかれた野郎だ。

G H Q本部の第一生命ビル前で無人トラックが爆発し警備員が2人死亡、合麻法執行長官が拉致られ、数日後多摩川上流で爆死体が発見された。小さい事件もG H Q職員の車や警察車両の爆破や地方交番の放火が起こっていた。それは新聞の隅に載るくらいだったけどね。爆弾騒ぎは激化し、物騒な世の中になった。

リクはサイオンジと交代で吉田総理大臣の警護に当たっていた。リクが帰ってきたら、何故か俺の部屋で死んだように寝ていた。バタンキューしたリクを起こす訳にいかないので俺は渋谷廊下で寝た。サーボマーの間接的被害を受けた俺は翌日風邪をばっちりひいた。ついに俺の家までサーボマー被害がやってきた。

「マサカド、ごめんね」

「気にすんな、お前忙しいだろう」

そうは言ったものも俺は風邪をひくと長引くのだ。俺は合麻法執行による薬漬けのせいで抗生物質が効かない体質になっていたのだ。カズサが気を利かせてしょうが湯をくんでくれた。飲み干そうとするが喉が焼けるように痛い。嚥下困難って奴だ。マジで吐きそう。

「強がりも大概にしたら。格好悪いよ」

黙れホノカ。俺の風邪うつしてやろうか。でもさ、リクは仕事に戻らなくていいのかよ。何故かリクは赤面した。察したカズサが代弁する。

「サイオンジ様が気を利かせてヨシオカさんを休ませて下さったそうです。呆けたままだと首相は守れないとおっしゃっていました」

俺のことを心配してくれたのか。それは長引く風邪の救いになった。こんなことで両想いだったことが分かるもんだ。恋のキューピットにサイオンジは似合わない。奴は人生最大の失敗をした。ローテーションからリクを抜いたこと。首相を逃がすのに手間取ってサーボマーに奴は捕まってしまったのだ。

犯人どもは本気だった。この頃の声明はタイプライターの無機質な文字に変わっていた。次の声明は非公式だ。

『GHQは警察と同じことをするらしい。正直残念だ。貴様らの民主化ごっこはお終いにしよう。新卿候はここに新関東連合を復活させることを宣言する』

とぼつちりを食らったのは俺だ。すぐにGHQに逮捕監禁された。24時間リクの監視を受ける。

「本当に知らないんですね。サシマさん、犯人グループが全員拘束されるまで貴方をここに監禁します」

仕事口調のリクだ。もうリクが俺に砕けた口調で話すことは今後一切無くなった。なぜならサーボマーはGHQの要求を全て拒絶し、サイオンジを爆殺しやがった。仲間以上に大切な人を失ってリクは心を閉ざした。

リクじゃない全くやる気のない監視者になった。たぶんその日はサイオンジの葬儀の日だった。そんな俺に訪ね人が来た。サイエー社長のスミクラだ。監視者に媚薬の札を数枚握らせその場を離れさせた。

「今日は吉田先生の使いだ。まさか君がまた暴走しているとは思っていなかったがようやく安心したよ」

「ああそんなつもりは微塵もない。あんたなら無実を証明するのにどうするよ」

なげやりな俺の質問にも、まともなヒトの答えが返ってきた。

「君のお父さんの九鬼先生の手前だ。わしにできることがある」

そう言うときミクラはカプセル錠剤を一つ手渡した。これは合麻法で使う薬の解毒薬だそうだ。科学者は作用薬を作れば必ず解毒薬を作る。監視者がもうじき戻ってくる。

もしこの薬が解毒どころか毒そのものだったら俺は死ぬだろう。時間がない。ええい、俺は信じる。人さし指の爪くらいの長さのカプセル錠剤を俺は呑みこんだ。すぐに眠気がやってきた。

「君の進む道が正しいように祈っている……」

ミクラは半分眠りかけた俺に今度は間違った道を選ばないように

忠告した。俺は頭の中が急速に回っているように感じた。ブラックアウト。

2＞挑戦状

「おい、起きろ。夕食の時間だ」

監視官に起こされた。ただの眠り薬じゃねえか。俺は期待過剰していたことにがっかりした。頭の中がぼんやりしている。監視官は身体の線から女性のようだった。その女は俺の口を手で塞ぎ小声で俺の耳元に言う。

「スミクラ氏からお話は伺っております。これから私がやることに合わせてください。まずはここを脱出しましょう。華堂会の車が外につけています」

了解。カズサがGHQに忍び込んでいた。狂言スタート。カズサは俺の喉にナイフを突き付け本職真っ青なドスのきいた声で叫ぶ。

「近づくんじゃねえ。こいつの命はないぞ。俺は全身に爆弾を巻いていんだ。さっさと道を開けろ！」

周りは突然のことでもできず道を開けた。爆弾の言葉に敏感だ。結構な有効打だ。俺はカズサの狂言で黒塗りの車に押し込められ逃走に成功した。解放感はなかった。突然頭を殴られたような頭痛がやってきた。

「どうしました。ああ例の薬が効いてきたんですね。しばらく耐えてください」

車は検問を回避して遠回りするが、もうすぐ捕まってしまう。下っ端のチンピラドライバーが諦めて言う。

「駄目だ。逃げられそうもない。姉さんよ、どうする」

「私が時間を稼ぎます」

カズサは時間稼ぎのためにまず自分が外に出た。俺はカズサに一瞥し、車外へ逃亡した。警察から逃げるのは二度目だ。下水道を使い、また警察を巻いた。

朝を待って、俺は銭湯に向かった。リクがないだけで俺は振り出しに戻った気がした。俺はバリエーズの瓶を空けていた。しばらく

してホノカが迎えにきた。彼女は切羽詰まった表情だった。

「どうしようこれ…あの火傷男につけられちゃった」

全身に爆弾が巻かれていた。今度は狂言ではない。

泣きじゃくって俺から離れないホノカをどうにか落ち着かせた。全身に巻かれた爆弾はダイヤル式になっていた。機動まであと30分だ。くそあの野郎どこまでも遊んでいやがる。

「奴から何か言われなかったか」

ホノカはおどおどした目を忙しく動かす。

「ええと、あいつは俺の名前をまだ思い出せないのかって言っていたわ。俺の名前がわかれば見方を変えてみるって」

名前だと。あいつは…。俺は頭を抱えた。膨大な情報が頭の中に戻ってくる。わかった。あいつは、かつて新関東連合で俺と一緒に戦った。あいつも朝鮮戦争の合麻地獄で生き残った。火傷が全身に残ったのは、上野で仲間の裏切りにあって焼き討ちを食らったからだ。

結城稔里^{ユウキミノリ}が奴の本名だ。新関東連合の超過激派だったあいつは俺達の思想と反していた。だから制裁を受けた。おっと時間がないんだ。俺の名前の見方を変えるだと。

「ユウキミノリだ…」

「答えになっていないわよ」

「カタカナを数字に変える。ミノリを3111にする」

解除成功。手の込んだクズみたいな装置を作るのは相変わらずのようだ。俺の血管はぶちぎれた。焼き討ち以上の痛い目を見せてやるよ。俺は鼻から血を流した。あの解毒薬の副作用か。俺の命が急速に削られていくようだ。

ホノカの声が聞こえなくなっていく。俺は俺を見ていた。臨死状態。俺の隣にリクが立っていた。

「世界の時間は止まった。君が臨死状態になってしまったからだ。ユウキは暴走して警察を何人も殺した。警視庁に立て籠もっているが、君が死んでから数時間後に後を追うだろう。彼と未来を変えてほしい」

「俺は死んだなら何もできない。未来の手先のあんたがやるべきだ」

「いいや、ヨシオカリクは寝ている。私は彼女の身体を借りている存在、時の女王だ。君の身体はサシマホノカが病院へ運んでくれる。彼女に任せれば大丈夫だ」

「俺が未来を変えることができるのか」

「運命を開くのは君次第だ」

俺がこの世に2人いる。本当は知らなくていいこともある。ホノカの本名のように。リクもとい時の女王はモーターサイクルのエンジンで吹かした。俺は促されるままだ。

終章>デス・ガン・ロシアンルーレット

女王と俺は警視庁を囲む機動隊の脇を歩いて中へ入った。誰も気付かない。奴らに死人は見えないようだ。中で倒れているのは警官、奴に同調した新関東連合奴らが俺らを見ずに外を窺っている。

「死人に目なし、口なしか」

「いいえ、私たちは彼らと違う空間にいるだけ。最後に貴方の覚悟を聞かせてほしい」

「それはできない。未来に対して俺は責任がない。ユウキだって未来に導かれてクーデターを起こしたわけじゃないだろう」

「それならどうしてここまで来たんだ」

俺は落ちていた警察の拳銃を拾って、弾を一発だけ込めた。

「この一発であいつと蹴りをつけるためさ」

国家権力と闘うバカを始末する。俺と一緒に地獄へ落ちろ。俺は気持ちしが固まった。女王は笑った。それでは身体をこの世へ戻そう。

俺は臨死から解放されてユウキの前へ立った。

「ユウキ、お前はやりすぎた。もうお終いにしろ」

ユウキは火傷の頬を緩ませ笑った。ここまでどうやってきたのかは聞かない。その必要がないと察したからだろう。

「いいよ。新関東連合のルールで決着をつけよう」

デス・ガン・ロシアンルーレット。ルールは回転式の拳銃と一発の弾丸を塙飼う。弾が不発なら自分のこめかみを撃つ。弾丸ならば相手を撃ち殺す。6発の内1発だ。確率6分の1で相手を殺すか、自分のこめかみを撃ち抜くデスゲームだ。

回転する弾は重さで回転音が違う。俺は運というより音を読むことができた。それは殺しの時代に身に付けた勘だ。

一発目はいかれた爆弾魔が不発。二発目俺も不発。三発目、奴は嘗めるような目をして俺を見て、一気にこめかみへ引き金を引いた。

回る音、次は当り目だ。俺は表情なしに自分の腹を撃った。大量出血。賭けは奴の勝ち、奴は薬が切れたジャンキーのような壊れた笑いだった。自爆、自爆しやがった。いいや、ルールは守る。俺は奴の大腿部を撃った。

「どこ見てんだよ。俺は最初から撃ってなんかいない。この弾はお前を射抜く魔弾だ」

俺は自殺するほどバカじゃない。自殺の朝鮮半島で生き残った俺だ。ユウキは狼狽していた。大腿は動脈が走っている。薬漬けの俺らは血小板が足りずに血が固まらない。死が近づく。

「

ほら止血しないと死ぬぞ。…これが現実だ。冗談は終わりだ」

芝居は終わり。本当は俺が俺自身を撃った。奴は俺の言葉で自分が撃たれたと錯覚した。薬物中毒の奴は妄想がひどかった。鉛筆だつて火鉢になる。もがき苦しんでいた。

俺は自分の身体が消えていく感覚を受けた。女王はこの矛盾した歴史^{かい}をともに戻したかっただけだろう。ついに連続爆弾事件主犯たちは突入してきた機動隊に全員捕縛された。

新世界。ユウキが自殺しない未来に変わった。俺も奇跡的に死んでいない。しかし俺は薬漬けで肝臓が壊れた。肝硬変で余命6カ月らしい。

執行官が行った悪行はこの事件をきっかけに世の中に明るみにされた。吉田首相が国会で証人喚問したからね。そこで俺は最後の証言をした。

薬に翻弄された人生と笑わないでほしい。薬は毒だ。それが分かっているても人類は病氣と闘うために薬を使う道を選ぶのだろう。

機密給仕？ E

N D

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8576o/>

機密給仕～シークレットサービス～？

2010年11月23日05時32分発行